２０２３／０９／２４　　礼拝メッセージ　　近藤崇志　牧師

主　　題：脱ぎ捨てるべき古い人②
聖書箇所：コロサイ人への手紙　３章８－１１節

テーマ：キリストによって新しくされた者は罪に対してどのように応答して生きていくのか？

今朝も続けて見ていくのはコロサイ人への手紙３章のみことばです。きょうは特に８－１１節の部分を中心に一緒に考えてみたいと思います。でもその内容に入っていく前に、まずは少し皆さんに考えてほしい簡単な穴埋め問題があります。今から全部で三つ、皆さんもよく知っている聖書のストーリーが描かれている箇所をお読みします。その際に空欄に当てはまると思われることばを当ててみてください。まず一箇所目はカインとアベルのストーリーから創世記４：３－５にこう書いています。「**:3 ある時期になって、カインは、地の作物から【主】へのささげ物を持って来たが、:4 アベルもまた彼の羊の初子の中から、それも最上のものを持って来た。【主】はアベルとそのささげ物とに目を留められた。:5 だが、カインとそのささげ物には目を留められなかった。それで、カインはひどく＿＿、顔を伏せた。**」二箇所目はサウルとダビデのストーリーから、ダビデがゴリアテを打った後、凱旋したときの様子がⅠサムエル１８：７－８に描かれていました。「**:7 女たちは、笑いながら、くり返してこう歌った。「サウルは千を打ち、ダビデは万を打った。」:8 サウルは、このことばを聞いて、非常に＿＿、不満に思って言った。「ダビデには万を当て、私には千を当てた。彼にないのは王位だけだ。」**」そして最後三箇所目はヘロデ王様と博士たちのストーリーから、博士たちが夢で、ヘロデのところに戻るなという戒めを受けた後の王様の様子が描かれていました。マタイ２：１６「**その後、ヘロデは、博士たちにだまされたことがわかると、非常に＿＿＿、人をやって、ベツレヘムとその近辺の二歳以下の男の子をひとり残らず殺させた。**」さて、三つの空欄に当てはまることばはわかったでしょうか？一箇目は「**怒り**」でした。二箇所目は、サウロは非常に「**怒り**」。最後三箇所目は、ヘロデは非常に「**おこって**」でした。怒ったわけです。ここに登場している３名の人物、原因はそれぞれであれ、どれも同じ「怒る」という応答をしていました。

ここで改めて皆さんに考えてほしいのは、この「怒り」というものが、どれほど深刻な問題を最初からもたらすものであったのか、ということです。今三つだけ考えましたが、カインの怒りはいったい何を引き起こしたでしょう？カインの怒りは、人類最初の殺人を引き起こすことになりました。サウルの怒りは何を引き起こしたでしょう？サウルの怒りは、本来は愛していたダビデに対するねたみを生み、関係が崩れ、そしてそのいのちを狙おうとする行為までをも生み出しました。ヘロデ王の怒りは何を生み出したか？イエス様のいのちを奪おうとする深刻な殺意を引き起こしていたのです。

人の抱く怒りというのは、これまでも確かに大きな結果をもたらしてきました。聖書を見ればそのことは繰り返し、繰り返し教え続けられているのです。そして残念ながら、この怒りという問題は、もう終わってしまった問題ではありません。今を生きている私たちひとりひとりにとっても、私たちの生活においても、変わらず存在しているのです。ロバート・ジョーンズという先生も怒りについてこう述べていました。「「怒り」は普遍的な問題であり、あらゆる文化に蔓延し、あらゆる世代が経験します。この存在から隔離されていたり、その毒から免れている者は一人もいません。それは一人一人に浸透し、私たちの最も親密な関係を台無しにします。怒りは堕落した人間の構造の一部なのです。悲しいことに、これは私たちのクリスチャンの家庭や教会においても当てはまります。」聖書は私たちに対して「怒り」というものがどれだけ大きな影響もたらすものなのかということを繰り返し教え続けているのです。でも、実際はどうでしょう？私たち自身は普段、こういった憤りや怒りといった問題に対して、聖書が教えているような危機感を持って向き合っているでしょうか？自分自身が内に抱くそのような問

題に対して、きちんとみことばによって対応しようとしているでしょうか？いや、そもそも私たちは聖書が教えている怒りの問題の深刻さを、本当にわかっているのでしょうか？

〇脱ぎ捨てるべき古い人：新しくされた者に対する応答

１．自分自身の罪を殺してしまうこと　５－７節

先週は皆さんと一緒に５－７節を見ました。５－７節を通してパウロは、新しくされた者が罪に対してとるべき一つ目の応答を教えてくれていたのです。「罪を見るなら殺してしまいなさい」これがパウロが求めていた応答でした。５節でパウロは、特に殺してしまうべき性的な罪というものを挙げていたのです。今回は二つ目となる応答、特に「怒り」に関連した、人との関係における罪に対しての応答を８－１１節を通して考えてみたいと思います。ですから皆さん、ぜひ自分自身のこととしていま一度考えてみてください。怒りはみな問題として持っています。今自分は持っていないと思っている方があるなら、よくきょうのみことばに耳を傾けてください。みことばははっきりと、その罪がもたらす結果は非常に大きなものであるということを明らかにしていました。もしその罪を放っておくなら、自分が喜びや平安を失ってしまうだけではなく、人との関係を壊してしまう危険性があることをも警告していたのです。では、いったいどんなことをパウロは教えていたのでしょう？８－１１節をよく見てください。

コロサイ３：８－１１

「:8 しかし今は、あなたがたも、すべてこれらのこと、すなわち、怒り、憤り、悪意、そしり、あなたがたの口から出る恥ずべきことばを、捨ててしまいなさい。:9 互いに偽りを言ってはいけません。あなたがたは、古い人をその行いといっしょに脱ぎ捨てて、:10 新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至るのです。:11 そこには、ギリシヤ人とユダヤ人、割礼の有無、未開人、スクテヤ人、奴隷と自由人というような区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。」

２．人に対する罪を捨ててしまうこと　８－１１節

さて、新しくされた者の罪に対する応答ですが、二つ目は「人に対する罪を捨ててしまうこと」です。キリストによって新しく造り変えられた者は、だれかとの関係をこじらせてしまったり、壊してしまうといった罪をも捨ててしまうのだ、というのです。８－９節の頭までにこう書いていました。「**:8 しかし今は、あなたがたも、すべてこれらのこと、すなわち、怒り、憤り、悪意、そしり、あなたがたの口から出る恥ずべきことばを、捨ててしまいなさい。:9 互いに偽りを言ってはいけません。**」と。パウロはここではっきりと命じていました。「**捨ててしまいなさい**」と。この「**捨ててしまいなさい**」ということばは非常に興味深いもので、もともと「何かを剥ぎ取る」とか「取り除く」という意味が含まれています。そして特に比喩的に用いられれば、これは「人が衣服を脱ぎ捨てること」を表していたりもするものでした。想像してみてください。一日の畑仕事を終えた農家の人の着ている服は、まちがいなく砂や泥や汗といったようなものですっかり汚れてしまっているでしょう。もしその人が家に帰ってくれば、真っ先に何します？おそらく当然、その汚れきった服を脱ぎ捨ててしまうでしょう。次の日には、この人は新しい服を着ます。脱ぎ捨てた、汚れた古い服をまた自分の手に取って再び身につけようとはしないのです。

パウロはこれと同じことを信仰者に求めていました。確かに救われる以前はみな例外なく罪によって汚れきっていました。でもキリストによって新しくされたからこそ、信仰者はすでに罪に対して死んだ者として、ますますその汚い罪というものを脱ぎ捨てながら歩んでいこうとするのです。かつて身にまとっていたその古い服を脱ぎ捨てたら、それを再び身につけるようなことはしないのです。それが新しくされた者の罪に対する応答でした。新しくされた者は古いものを脱ぎ捨てていくのです。

では、古いものというのは具体的に何のことを言うのでしょう？どんな罪を私たちは脱ぎ捨てるのでしょう？そのことをパウロはこの８－９節でリストとして六つ挙げていました。順番に見てみましょう。

●信仰者が捨ててしまうべき六つの罪：

ａ）怒り

ｂ）憤り

最初に一つ目と二つ目を同時に見ます。一つ目と二つ目に挙げられていたのは「**怒り**」と「**憤り**」でした。８節に「**しかし今は、あなたがたも、すべてこれらのこと、すなわち、怒り、憤り、**」と書いていました。「**怒り**」と「**憤り**」これら二つのことばはよく似ています。どちらも「人が心のうちで抱く感情的な不快さや不満」を表しています。ただもう少し詳しく言えば、まず「**怒り**」というのは「人の奥底でふつふつと燃えている怒り」のことを表現していました。この怒りというのは、表面上はうまく取り繕っているかもしれません。でも心の中では、苦い思いや不満、憎しみといったものがずっとくすぶり続けているのです。それが「怒り」でした。逆にもう一つあった「**憤り**」ということばは、「瞬間的に燃え上がる制御することのできない怒り」のことを表現していました。「憤り」はこっそり隠れてはいません。突発的で抑え切れない感情の爆発のことを言うのです。ジョン・マッカーサー先生もこれらのことばに関してこう説明していました。「怒りと憤りは密接に関係しています。多くの場合、表面下に潜んでいる、煮えたぎるような怒りが、憤りの爆発を引き起こすのです。」と。まちがいなく神様はこのようなまちがった怒りというものを、よしとはしていませんでした。みことばも、信仰者にとっていかにこの怒りが危険で離れるべきものなのかということを、繰り返し、繰り返し教えていたのです。例えば箴言２９：１１には「**愚かな者は怒りをぶちまける。しかし知恵のある者はそれを内におさめる。**」またヤコブ１：１９－２０には「**:19…だれでも、聞くには早く、語るにはおそく、怒るにはおそいようにしなさい。:20 人の怒りは、神の義を実現するものではありません。**」とはっきりと言われていました。そのように私たちはみことばを通して、怒りというものから離れないといけないこと、怒りというものがいかに危険なものであるのかということを繰り返し見て取ることができるのです。

でも皆さん、私たちは実際の生活を振り返ってみるときに、こういった怒ったり憤りを抱いてしまうような場面に出くわすことは数多くありませんか？私たちはみな罪人であるので、たとえ親しい間柄であっても互いを傷つけてしまうことがあります。それが意図的なものであっても、意図的なものでなくても、私たち自身がだれかに対して罪を犯してしまうこともあれば、だれかが自分に対して罪を犯すことだってあるのです。そしてその結果、心の内で怒りを覚えてしまうそんな経験をしたことがあるのは私だけではないでしょう。もちろん怒りのかたちや表れは、人それぞれ異なります。「怒る」ということばを聞けば思い浮ぶように、怒りというものを、感情をすぐに表して手を上げてしまったり、暴言を吐いたりするようなかたちで表す人がいるかもしれませんし、ある人は、怒りというものを隠すのが非常にじょうずで、まるで普段は何の問題もないかのようにふるまっているかもしれません。でもその内側をちょっと見てみれば、今にも爆発しそうな不平不満や、敵意が絶え間なくあふれていたりするのです。ある人は怒りを、行動やふるまいで表すかもしれません。仕返しの機会をずっと求めていたり、逆に自分が距離を取って無関心を装うことで仕返しをしようとしている人がいるかもしれません。ある人は、その怒りをことばでもって表すかもしれません。直接その人に向かって非難のことばを発したり、直接はしたくないから間接的に隠れたところでゴシップや陰口を口にすることがあるかもしれません。怒りというものにはいろんな顔があるのです。

では、こういったまちがった怒りに共通している根底の問題がどこにあるか、わかります？それは自分の思い通りにならないこと、自分が考えてもいなかったこと、予期もしていなかったことなどが起こったことに対する、私たちの否定的な感情の応答に問題があるのです。一番最近あなたが怒っていた時

のことを振り返ってみてください。あなたはいったい何に対して怒っていましたか？私たちは自分の期待していたことが満たされなければ、自分が欲しているものが手に入らなければ、自分の求めていたことが果たされなければ、私たちはそれを満たしてくれなかった人に対して、それを妨げるようなものに対して、私たちはその願いを叶えてくれないその状況に対して、怒りや憤りを覚えるのです。少し赤ちゃんを思い浮かべてみてください。自分自身のほしいものを手にするために、赤ちゃんは何をしますか？彼らは場所や状況などは全く気にしませんね。親を求めて泣き叫びます。私たちはそこから成長しました。だから、私たちは赤ちゃんのようにところかまわず泣き叫んだりはしません。おそらく。でも同じように自分自身の欲するものを手にできなければ、私たちは別のかたちを通して、もっと言えば、まちがった怒りで、それに応答するのです。

ここがポイントです。怒りに関して大切な一つのことをよく覚えておいてください。それは、私たちの抱く怒りというのは、私たち自身の誤った選択に原因がある、ということです。どういうことなのか？少し考えてみてください。おそらく私たちが怒りとか憤りを覚えるようなとき、私たちはよくほかの人や状況にその原因があると思っています。こんなこと考えたことありません？私はただ自分のことをしていたのに、だれかがやって来て私を怒らせました。その人が来るまでは、私は怒りを抱いていませんでした。だから、原因はまちがいなくやって来たその人にあります。その人が別の行動をとっていたなら、私は怒らなかったでしょう…と。自分の怒りの原因は自分自身ではなくて周りの者にある、と私たちは責めるわけです。あなたが私を怒らせましたと。この状況が私のうちに憤りを引き起こしたんですと。でももしそのように考えているなら、それは聖書が教えていることではないということです。

聖書は明白に、私たちの怒りの責任は私たち自身にあると教えています。だれかが、私たちが怒るようにと強制したのではありません。私たちは、私たち自身が欲しているものを手にすることができなかったから、欲しているもの満たすことができなかったから、自分の心で「怒る」という選択をしているに過ぎないのです。このことをヤコブがはっきりと教えてくれていました。ヤコブ４：１－２にこう記されています。「:1 **何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いがあるのでしょう。あなたがたのからだの中で戦う欲望が原因ではありませんか。:2 あなたがたは、ほしがっても自分のものにならないと、人殺しをするのです。うらやんでも手に入れることができないと、争ったり、戦ったりするのです。あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。**」と。

さて皆さん、いったい何が原因で私たちは戦ったり言い争ったりするのでしょう？いったい何が原因で私たちは怒りや憤りをめぐらせるのでしょう。それは、私たちのからだの中で戦う欲望のゆえでした。私たちが自分の欲しているものを何としてでも手にしたいというその欲が原因だということです。エドワード・ウェルチという先生も、この怒りについてわかりやすく説明してくれていました。「怒りは、罪が犯されたときに降りかかってくるものではありません。怒りはすでに私たちの内に存在しています。その初期の状態を、欲望と呼んだりもします。私たちは権力、快楽、平和、安らぎ、愛、尊敬などを欲しています。そして時に、その欲求と私たちの間に何かが立ちはだかるわけです。すると私たちは何かを欲しているにも関わらず、それを手にすることができません。すると内に怒りを覚えるのです。それ（怒り）を引き出すには、ただちょうど良い機会が求められるだけなのです。」と。何かを願うこと自体がまちがっているのではありません。私たちはいろんなものを欲するのです。でも、その願いが貪欲へと変わってしまうなら、そこには大きな罪の危険が存在しています。「何かがほしいから、何かが必要だ」に変わってしまえば、たとえそれ自体は正しいもの、良いものであったとしても、それを手にするのを妨げてくるようなものに対して、私たちは怒りを覚えるようになるわけです。

もし私たちが自分の思い通りにならないことに腹を立てて、周りの人や状況に対していつまでも心の中で不平不満を思い続けているなら、その怒りや憤りというものは、新しくされた者にふさわしいものではありませんでした。そういったものを覚えるなら、パウロは言っていたのです。「自分のうちから

捨ててしまいなさい。」と。でもそう聞いて、このように思う人があるかもしれません。どうして自分が怒りを捨てないといけないのでしょうか？そもそもあの人が先にひどいことをしてきたんですけど。あの人が悪いんですけど。私のもとにやって来て謝るまでは私は決して赦しません。それまでは自分の内にある苦い思を持ち続けたとしても別に構わないでしょう?!…と。そのようにして私たちは自分ではなく、ほかの人が自分のとこにやって来ることを願うのですが、でももしそのように考えているなら、よく次のみことばを見てください。パウロは怒りや憤りが持っている問題は、そこで留まらない、と教えていました。その罪は、また別の罪へと繋がっていくのです。

ｃ）口から出る恥ずべきことば

それは、三つ目に挙げられていた「**悪意**」でした。8 節続きに書いています。この「**悪意**」ということばは、「人に対する意地悪な心や態度」のことを表しています。ひとりの註解者はこのことばを次のように定義していました。「「悪意」とは、他者が苦しんだり、痛みや傷、苦悩を味わうのを見たいという、しばしば説明のつかない根深い願望を意味している。」と。想像できません？悪意を持っているその者の心の内には、キリストのような優しさや愛というものは存在していません。その心には、自分自身を傷つけた者に対する憎しみや、嫌悪感、敵意というものがあふれかえっているのです。そして皆さん、何より気づいていてほしいのは、そんな悪意のある心というのは、怒りや憤りを置いておくことで生まれてくる、ということです。自分の内でまちがった怒りを覚えるとき、だれかに対して敵意や冷たい思いを覚えるとき、私たちはこのように自分に言い聞かせているかもしれません。そのままにしておいても別に何の問題も起こらない。別にだれにも言わなければ、自分のうちに抱えてさえいればそれは大きな影響及ぼすことはないだろう…と。でも、みことばは決してそのようには教えていませんでした。忘れてはいけません。解決していない怒りがあるなら、それは必ず私たちのうちで根を張るようになります。皆さん、こんな経験はありません？相手のしたことをいつまでも赦さずに、苦い思いや不満を内で思いめぐらし続けていれば、その心は次第に喜びや平安を失っていくようになります。悪い考えや憎しみといったものに支配されるようになっていくのです。だからこそ、そんな危険な怒りや悪意は、新しくされた者にとってすべて捨ててしまわなければいけないものでした。エペソ４：３１でこう言われています。「**無慈悲、憤り、怒り、叫び、そしりなどを、いっさいの悪意とともに、みな捨て去りなさい。**」 と。

ここまで見てきて、私たちは怒りも憤り、悪意というものが非常に危険なものであることがよくわかりました。でももしそれでもなお私たちが怒りや悪意というものをそのままに置き続けていくなら、どうなるか？そうすれば、その心に満ちているものが、ついには口へとやって来るのです。心の考えや思いが今度はことばとなって現れるようになるのです。それが皆さん続きに挙げられていた四つ目と五つ目のものでした。

ｄ）そしり

ｅ）口から出る恥ずべきことば

８節の続きに書いています。悪意の後から「**そしり、あなたがたの口から出る恥ずべきことば**」と。四つ目と五つ目は「**そしり**」と「**口から出る恥ずべきことば**」でした。まずこの「**そしり**」ということばは、「だれかの名誉や評判を傷つけるようなあらゆることば」を表しています。だれかの信用を落とそうとするそんな誹謗中傷のことを言うわけです。もう一つの「**口から出る恥ずべきことば**」ですが、この「**口から出る恥ずべきことば**」の「**恥ずべきことば**」は、「だれかを傷つけることを目的とする、人を不快にさせる汚いことば」であったり、「不適切で下品な会話や卑猥な冗談」のことを表していました。この「**そしり**」にしても「**恥ずべきことば**」にしても、悪意に満ちた心から出てくることばを用いて、自分を傷つけた者を何とかして傷つけよう、おとしめようとするわけです。そして、私たちはそれをするためにいろいろな巧みな手段を持っています。本人に直接投げかけるような悪口や中傷、それから不適切な

冗談といったものでそれを行おうとするかもしれませんし、もしくは本人がいないところで流す陰口やゴシップかもしれません。特にこのゴシップやうわさ話というのは、私たちにとって最も誘惑を受けるものかもしれません。みことばもこう言っていたのです。箴言１８：８「**陰口をたたく者のことばはおいしい食べ物のようだ。腹の奥に下っていく。**」と。目の前にある食べ物がまずそうなら、だれも寄って行かないでしょう。でも、まるでおいしい食べ物かのように陰口は魅力的に思えるからこそ、私たちは悪いと思っていながらも本人のいないところでその人を傷つけるようなことばを発することがあります。その本人が目の前にいれば私たちは口にしないような、本来話す必要もないような情報を口にして、見えないところでその人の評判を落とそうとすることもあるのです。そしてもちろん、そのような人を傷つける「そしり」や「恥ずべきことば」というのは、どんなかたちであれ神様の前によしとされるものではありませんでした。神様をほめたたえて、人の徳を高めることばを発すべき私たちの新しくされた者の口が、人をおとしめるために用いられることなどあってはならなかったのです。ヤコブもこう宣べていました。ヤコブ３：９－１０「**:9 私たちは、舌をもって、主であり父である方をほめたたえ、同じ舌をもって、神にかたどって造られた人をのろいます。:10 賛美とのろいが同じ口から出て来るのです。私の兄弟たち。このようなことは、あってはなりません。**」と。

ｆ）偽り

そして最後に９節の頭で挙げられていたものは「**偽り**」でした。気づかれたと思いますが、これも同じく私たちのことばに関するものでした。怒りや悪意に満ちた私たちが発する、人を欺こうとするうそや偽りといったもの、私たちが怒りや憤りや悪意にあふれて発する、その人をだまそうとするような、人を欺こうとするようなうそや偽りといったもの、それがこの「**偽り**」ということばですが、そういったものは当然、新しくされた者にふさわしいふるまいではありませんでした。いや、もっと言えば、私たちが「偽り」を口にするようなとき、私たちはある存在を真似ているのと同じことになります。いったいだれか？それは、自分自身が偽り者であって、偽りの父であるサタンです。そのうちに真理をいっさい持っていない、私たちのかつての主人であるサタンの姿に倣っていることになるのです。だからこそ、偽り、うそというものを私たちは捨ててしまわなければなりません。キリストによって新しくされて、新しい主人に仕えるようになった者は、以前の古い主人に仕えているような歩みは捨ててしまわなければいけないというわけです。

さてここまで私たちは、捨ててしまわなければならない六つの罪を見てきました。改めて、これはまさにイエス様が言われていたあのことばの通りだと思いませんか？マタイ１２：３４－３５でイエス様はこう言われていたのです。「**…心に満ちていることを口が話すのです。良い人は、良い倉から良い物を取り出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を取り出すものです。**」と。「**心に満ちていることを口が話すのです。**」そうであるなら、私たちはいつも覚えておかなければいけません。私たちの口にしていることばは、まさに私たちの心の状態を教えてくれているものだということです。私たちの内側に満ちているものが、口から外側に出てきているわけです。私たちはおとなです。だから私たちは頑張れば表面はいくらでも取り繕うことができます。けれど、もし私たちのうちに解決していない怒りや憤りがあるなら、だれかに対する敵意を持ち続けているなら、無関心さがずっとあるなら、そういったものを抱え続けていれば、口を開けばその中の状態が明らかになるのです。だからこそ私たちは自分自身のこととして考えてみなくてはいけません。果たして私たちが普段話していることばはどのようなものなのかということです。私たちが大勢の兄弟姉妹の間で発しているときのことばだけではありません。私たちが職場にあって、家庭にあって話していることばだけでもありません。私たちが家族や親しい友人の間で話しているような、個人的な閉鎖的な空間で話しているようなことばも同じです。どんなことばを私たちは話しているでしょう？どんな話の内容を私たちは口にしているでしょう？一つ言えることがあります。それは、私たちの心にあるものを露わにしているそのことばは、その人の霊的状態を教えてくれるということで

す。その人がキリストの弟子として本当に歩んでいるのかどうかということも、その人の信仰が本当に成長しているのかということもその口は明らかにしてくれるということです。ヤコブもこのようにはっきりと宣べていました。ヤコブ１：２６にこう書いていました。「**自分は宗教に熱心であると思っても、自分の舌にくつわをかけず、自分の心を欺いているなら、そのような人の宗教はむなしいものです。**」と。ある人は自分自身のことを熱心な人だと考えているかもしれません。救われてから長い間教会に通い続けていて、いろんな聖書のことも知っていて、一生懸命に仕えて、外側を見ればすばらしい人物、すばらしい歩みをしていると思っているかもしれません。一生懸命に仕えていて、外側を見れば忠実に歩んでいる人に見えるかもしれません。そのような人は数多くいます。でももし自分の舌をいつまでも制御することなく、怒りや憤りを思いのままにさせ続けているのなら、ヤコブはそんな人に言うのです。「**そのような人の宗教はむなしい**」と。どれだけ人の目に見える部分が熱心で自分は大丈夫だと考えようとしていたとしても、内側の心を表しているそのことばが全く別のことを語っているのであれば、それは自分を欺いているだけに過ぎないと。だから皆さん、自分自身の心をよく吟味することです。

日々の歩みにおいて、確かに私たちはみな同じです。自分の思い通りにならないようなこともあれば、だれかに気分を害されるようなこともあるし、期待していたことが果たされないこともあります。そういったときに私たちはいろんな怒りや憤りを覚えてしまう誘惑に駆られるのです。そのようなものがやって来たときに、もし怒ったり憤ってしまったのであれば、その怒りや憤りをそのままにしておこうとしていないでしょうか？それともそういったものをすぐに捨ててしまおうとしているでしょうか？私たちは、かっとなってことばを発することも、相手の気持ちを考えずになんとなくした発言が人を傷つけたり悲しませたりしてしまうことも、何度も経験します。でも皆さん、私たちの発するそのことばは、真理を語る者としてますます変えられ続けているでしょうか？私たちの発しているそのことばが、ますます人の徳を高めて神様の栄光を現わすものとして変えられ続けているでしょうか？自分自身のこととしてよく考えてみてください。

さてここまで、パウロは信仰者に対して「罪を捨ててしまうように」と命じてきました。かつての古い性質に再び捕らわれるのではなくて、それを脱ぎ捨てる者としてひとりひとりが歩んでいくことを求めていました。でも、パウロは単に「では、これをしなさい。」と命令だけを与えていたのでもありませんでした。私たちは先週も見ましたが、同時に彼は、どうして私たちがそれをしないといけないのか、どうして私たちが罪を捨てることに忠実であるべきなのか、その理由もここで二つ挙げてくれていました。

●二つの理由

１）私たちがすでに新しい者へと変えられているから　９ｂ－１０節

まず一つ目の理由が９節の続きから１０節に書かれていました。「**:9…あなたがたは、古い人をその行いと一緒に脱ぎ捨てて、:10 新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至るのです。**」どうして私たちが罪を捨てることに忠実であるべきなのか、一つ目の理由はもう明白でした。それは、「私たちがもうすでに新しい人へと変えられているから」でした。このことに関してパウロはもう何度も何度も繰り返しコロサイの信仰者たちに対して、また私たちに教え続けてくれていました。キリストによって救われた者はだれでも例外なくキリストとともに死んで、新しい者へと造り変えられましたと。神様がその働きを成してくださいましたと。また「新しく造り変えられた」と言うときに、これは、これまでの古い生き方に、新しい考えや生き方、自分の思う良い行いを付け加えた、ということでは全くありません。かつて神様に逆らっていて自分勝手に生きていたその古い自分は死んでしまって、神様に従順に従い、何よりも神様を愛して生きていこうとする、そういった新しい自分へと神様によって一新されたわけです。Ⅱコリント５：１７でもこう言われていました。「**だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新**

しくなりました。」「古いものは過ぎ去りました。新しくなったのです。」と。新しくなったからこそ、新しく造り変えられたからこそ、私たちはそれにふさわしい者として、ますます新しくされ続けていくことが求められていました。確かに新しくされた後も私たちは罪との戦いを経験します。だからこそ、もう脱ぎ捨ててしまった、汚れた古い自分に戻るのではなくて、ますます造りの主であるキリストのかたちに変えられて、聖い者へと日々変えられていこうとするのです。神様の働きを祈り、助けを求めながら、みことばを通して私たちはそのようにして変えられていくのです。その歩みにおいてみことばが欠かせないということはもう言うまでもありません。ペテロもはっきりと口にしていました。「**生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。**」（Ｉペテロ２：２）自分の知恵やこの世の教え、そういったものを頼りに成長を目指していくのではありません。ただみことばを通して、神様やキリストを知って、御霊の助けを祈り求めながら、私たちはますますみことばの真理を生きていこうとするのです。かつては自分が中心でした。救われた今はキリストを中心とする者へと変えられました。だから以前の罪に支配されていた時のように、罪の支配に身をゆだねる者としてはもう歩んで行かないのです。そこから解放された者として、キリストの前にそういった喜ばれないかつての自分があるのなら、神様の助けによって、どんな罪であろうとも取り除いていこうとするわけです。それが新しくされた者の生き方でした。それが新しくされた者にとってふさわしい応答でした。新しくされた者として、それにふさわしくない古い罪を捨ててしまおうとする――これが、なぜ私たちがこの罪を捨ててしまうことを喜んで忠実になしておくべきかの、一つ目の理由でした。

２）私たちがキリストにあって一つとされているから　１１節

そして最後にもう一つだけ、二つ目の理由が１１節に記されていました。二つ目の理由がこう記されています。「 **そこには、ギリシヤ人とユダヤ人、割礼の有無、未開人、スクテヤ人、奴隷と自由人というような区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。**」と。どうして私たちが罪を捨てることに忠実であるべきなのか、二つ目の理由、それは「 私たちがキリストにあって一つとされているから」でした。さらに言えば、すべての信仰者を隔てていた壁や区別といったものは、キリストにあってもうなくなってしまったということです。ちょっと振り返ってみましょう。1 世紀のあの教会の時代において、分裂や争いといった問題は数多く存在していました。当時の人々の間に存在していたいろいろな違いというものがそれを引き起こしていたのです。例えばここにもありましたが、ギリシア人とユダヤ人との違いでした。ギリシア人とユダヤ人との間には、人種の違いや文化の違い、割礼を含めた宗教の違いというものが存在していました。またそれだけではありません。ここに「**未開人、スクテア人**」とありました。未開人やスクテア人というのは、当時の社会では、無知な野蛮な人として扱われていた者たちでした。ですから一部の教養のあるユダヤ人やギリシャ人というのは、そういった人々を野蛮な者として軽蔑の目で見ていたりもしました。ここには社会的な立場や地位といった違いも存在していたのです。社会的なもの、地位に関するもの、民族のもの、そういったものがあったのです。ほかにも挙げればきりがありませんが、そのようなさまざまな違いが残念ながら人々の間に壁を作って、対立や争いを生み出していました。それらの違いが人々を一つにするのではなくて、その間を引き裂いていたのです。

そして、これは今の時代も別に変わってはいません。私たちを見ても、私たちの間でも違いというものは存在しています。性別の違いももちろんあります。年齢も違いますし、国籍や文化、性格や価値観や育ってきた環境といったもの…私たちの間にも異なる点は存在しているのです。そしてそれが時に原因となって、すれ違いがあったり、争いが起こったり、不一致が生まれることだってあるのです。でもそういった違いを前にして、パウロはここで言うのです。「そのようなさまざまな区別や壁というのは、キリストにあってもう取り去られました。 キリストがすべてであって、キリストにあって私たち

はもう一つとされました。」と。これが、私たちにとっても大切な真理でした。確かに違いは今もあります。でもどんな違いがあっても、それ以上に私たちは同じキリストによって救われて、同じキリストの一つのからだに属する者としてすでに変えられたのです。同じことをパウロは別の箇所でもこう宣べていました。ガラテヤ３：２８「**ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。**」キリスト・イエスにあって一つです。そしてもし私たちが一つのからだとされているのなら、同じ一つのからだに召されているのなら、私たちは互いの間で一致を保つということが欠かせないものでした。決して自分を優先して、ほかのからだの部分を自分の思いによって傷つけるようなことはあってはならないのです。そのことをみことばもはっきりと記してくれていました。Ⅰコリント１２：２０－２１にこうあります。「**:20 しかしこういうわけで、器官は多くありますが、からだは一つなのです。:21 そこで、目が手に向かって、「私はあなたを必要としない」と言うことはできないし、頭が足に向かって、「私はあなたを必要としない」と言うこともできません。**」一つのからだに召されている私たちにとって、同じからだに属しているほかの兄弟をどのように取り扱うのかということは、覚えていなければならない重要なことでした。

自分の歩みをちょっと振り返ってみてください。あの兄弟は自分とはちょっと違うから、あの姉妹は自分と合わないからと言って、切り捨てようとしていないでしょうか？自分の思い通りにならない人がいれば、そのような人に対して怒りや憤り、敵意を覚えて、そういった人から距離を取ったり、また影で陰口やゴシップなどを流したりしていないでしょうか？そしてもし、私たちがそのようにほかの人に対して悪意を覚えるような誘惑に会うのなら、自分自身に問い続けることです。今自分がやっていることは、私のために死んでくださったその主を喜ばせることなのかと。今自分が相手に対して抱いている思いは、同じキリストのからだに属するものと一致を保っていくのにふさわしいものなのかと。皆さん、私たちがことばを発するときに考えることです。今発言しようとしているものが、一致をもたらすものなのか、分裂へと導くものなのか、もし分裂へと導くものなら、同じ一つのからだを生きている者として、それをやめることです。聖書ははっきりと私たちに教えてくれていました。私たちは一人で生きてはいませんと。私たちは同じキリストのからだに属する者として互いに支え合って生きています。このからだに属している者の中で、だれ一人必要としない存在もいなければ、また、あの人と私は違うと言って区別する壁を作るような存在もありません。キリストを信じ救われた私たちはみな、キリストにあって一つとされているのです。皆さん、土台はキリストです。それが私たちにとってのすべてです。それなのに私たちが自分たちの勝手に土台をすり替えて、自分の基準でもって、あの人は気に食わない、あの人と私は違うと憤りを覚えたり、互いを傷つけ合おうとするなら、あの人は必要ないと切り捨てているのなら、それはどんなに主の前に愚かなことでしょう。キリストのからだを傷つける者ではなく、互いに助け合い、仕え合い、愛し合いながら、一つとされた者として歩んでいくことです。皆さん、「私たちはすでに一つとされた」と言われていました。一つとされた者として、一つとして歩んでいくのです。私たちはキリストにあって一つとされているからこそ、そのうちに分裂や争いを引き起こしてしまうそのような罪があるなら、そういったものは横に置いて捨ててしまおうとするわけです。自分ではなくて、キリストのからだを大切に思うから、だからそういった罪を横に置くのです。これが二つ目の理由でした。

さて皆さん、きょうは信仰者として捨ててしまうべき六つの罪を一緒に考えてきました。こういった罪を放っておくなら、大きな影響をもたらすことになります。自分自身だけではありません。周りの兄弟姉妹に対しても同じです。だからもしそういった罪を覚えるなら、私たちは忘れないことです。私たちはもうすでにキリストによって新しくされました。かつては、私たちは罪に燃え上がる神の怒りを受けるべき存在でした。でもその燃え上がる怒りを神がキリストを通して赦してくださって、その赦しを受けて今私たちは歩んでいるのです。その怒りを、その赦しを覚えるなら、私たちは自分たちの憤りや

怒りを横に置いていくことです。そして、その主のすばらしい恵みを覚え続けることです。私たちが周りを見るときに目にする兄弟姉妹も、同じようにして救われました。そうだとするなら、一つのものとされた者として、ともに上のものを見上げて、ともに上のものを求め続けていくことです。そのようにして、ともにキリストのすばらしさを証しする群れとしても変わり続けていきましょう。